郷土史への扉

造営三百年 霧島神宮 その❷

今年は、霧島神宮が正徳五（一七一五）年に現在の地に造営されてから三〇〇年を迎えます。これまでは霧島神宮の由来や度重なる造営の経緯について紹介してきましたが、今回は霧島神宮の社殿の構造について紹介します。

西の東照宮

霧島神宮は霧島山の中腹の傾斜地に、正面の勅使殿から登廊下、拝殿、幣殿、そして本殿へと段々と登るように配置しています。これは、霧島山系から噴出した溶岩が当地域まで流れてきており、その溶岩流の傾斜を巧みに利用して社殿を造営しています。

この傾斜地での社殿配置によって、正面の参道からの景色は、見る場所によってその表情が見事に移り変わる壮麗な美しさをつくり出しています。さらには社殿の壁画や彫刻、彩色は華やかな空間を醸し出しており、その造りは「西の日光東照宮」とも称されています。

霧島神宮社殿の配置

社殿の中心を通る軸線を辿っていくと、高千穂山頂に向かっていることが分かります。これは、現在の祭神は天照大神の孫で高千穂に降臨した瓊瓊杵尊を祀っていますが、三〇〇年前は高千穂峰を一つの御神体とみなして社殿を造営したことが分かります。

それぞれの建物の配置を見ると、社殿前方の両側に門守神社があります。

社殿の正面には勅使殿があります。これは勅使（天皇のお使い）が参拝するときに使われる建物であり、普段は一般の人たちはここで参拝しています。

勅使殿の後方には一段高い拝殿まで登廊下が続いており、その途中から西に廊下が伸びて、神に供える食べ物を料理する神饌所につながっています。

登廊下を登ると、拝殿・幣殿・本殿がありますが、建物としては一体となった大規模な複合社殿となっています。

これは神社にある狛犬や鳥居、寺院の仁王像と同じく、参拝する人に付いた穢れを祓ったり、神聖な場所を守護したりするためのものとされています。

社殿の正面には勅使殿があります。これは勅使（天皇のお使い）が参拝するときに使われる建物であり、普段は一般の人たちはここで参拝しています。

勅使殿の後方には一段高い拝殿まで登廊下が続いており、その途中から西に廊下が伸びて、神に供える食べ物を料理する神饌所につながっています。

登廊下を登ると、拝殿・幣殿・本殿がありますが、建物としては一体となった大規模な複合社殿となっています。

霧島神宮本殿

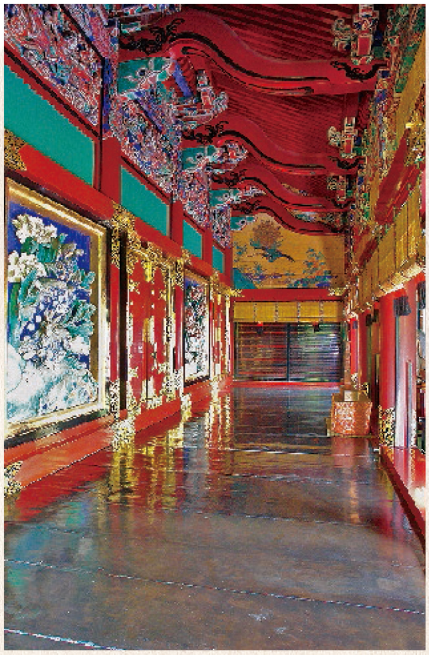
本殿の大きさは正面五間、側面四間と大規模なもので、屋根の形は日本においては古代より格式の高いとされてきた入母屋造りで、屋根の正面は約一間張り出した向拝があり、幣殿につながっています。

また、建物の※組物や各所に用いられている彫刻はダイナミックで鮮やかな色彩で表現されています。特に、本殿壁面の上部には、古代中国において後世の模範となるような孝行をした人物を描いた「二十四孝」の絵が色鮮やかに本殿を囲むように描かれています。

この「二十四孝」の壁画が、次の日程で一般公開されます。

次回も社殿の造りを紹介します。

（文責＝鈴）



本殿外廊下

傾斜に合わせた社殿

霧島神宮 本殿造営三〇〇年記念「二十四孝壁画拝観」

●日時＝十月三十一日（土）～十一月八日（日）午前十時～午後四時まで

●拝観料＝五〇〇円

問＝霧島神宮 ☎(57)0001

※柱などを支えるため木で組み合わせたもの。